

孤立 ネットの虚構におぼれ

アキバの傷痕

無差別
殺傷から10年



<3>

「車でつっこんで…ナイフを使います みんなさよなら 時間です」

二〇〇八年、秋葉原無差別殺傷事件を起こす直前に、死刑囚加藤智大(三五)がインターネットの掲示板に書き込んだ。二十分後、歩行者天国へトラックで突っ込み、ナイフで殺戮を繰り広げた。

加藤は後に法廷で、ネット掲示板で受けた嫌がらせを動機の一つに挙げた。無意味な言葉を連ねる「荒らし」や、加藤のふりをする「なりすまし」に「大切な人間関係が壊され、奪われた」。その結果、自分がどちらも傷ついたかを、顔も名前も知らないネット上の相手に分からせる。そのた

めに、面識のない人々を襲撃したのだという。

加藤は地元や職場など、本音でつながることができ

る。そう信じて、携帯電話で書き込みを続けた。

現実社会でトラブルが起きると人間関係を断ち切つてきた。ネットは「他に代わりのない、大切なもの」。

顔を合わせないからこそ、本音でつながることができ

る。「みんな敵」「殺人を合

う」と指摘する。「実社会より簡単に承認欲求が満たせ

る、手っ取り早い居場所。

現実社会でコミュニケーションが苦手な人ほど、のめり込むが、度を越えると無視される」。加藤は現実に加え、ネットでも孤立した。

ネットに過度な期待をかけた加藤を、鷺津は「いまならネット依存症」と分析

した。

「仲間」と力を合わせ、五人一組で敵と対決し、戦闘しながら陣地を奪う。

メassageを送り合い、味方の窮地を救つて「あり

する。当時は認知されていなかった疾患だ。その専門外来を、事件から三年後の「一年に国内で初めて開設した久里浜医療センタ（神奈川県）によると、統一された診断基準がまだない」ともあって、無自覚の「予備軍」が多い。山梨県に住む男性患者（三〇）も半年前まで、自分が

ネット依存だとは「気付かなかつた」。

加藤の事件後、スマート急速に普及した。SNSの返信で寝不足に陥り、ゲームに熱中して不登校になる

。現実との比重が逆転するほど、ネットに没入する若者が激増している。

だが実は加藤自身が法廷で、ネットにおぼれた愚かさを告白している。「事件後にネットから離れて、重要なのは現実の人間関係だと気付いた」。遅すぎたとはいえ「ネットではなく現実の中に居場所がたくさんあつたと思える」。

がどう」と返つてくると「普通にうれしかった」。

一日の半分以上をゲームに費やした。

退職後に向かった久里浜センタで「ネットに依存しすぎると、うつ症状が出る」と説明され、治療が開始された。三ヶ月の入院を終えた。三ヶ月の逃げ場だった。

「ネットは、現実の嫌なことからの逃避場だった」。

ネット依存症を治療中の男性。スマートフォンの使用は決められた時間だけに制限している=山梨県で

インターネット依存症は、オンラインゲームに依存する若年層が最多で、SNSに入する例も多い。世界保健機関（WHO）は今年、ゲームにのめり込む「ゲーム障害」を国際疾病分類に加える方針。「病気」と位置付けることで、行政や医療の対策が進むとみられる。

（敬称略）